

二〇一八(平成三〇)年度

# 昭和文学会 第六二回研究集会

会場 東洋大学 白山キャンパス 6号館 6211教室

〒一〇二八六〇六 東京都文京区白山 五―二八―二〇

(連絡先 Ⅸ:〇三―三九四五―七三二四)

日時 五月一三日(日) 一二時三〇分より

開会の辞

東洋大学文学部長 矢口 悦子

一二時三〇分より

## 【第一部】自由発表

転換点としての『抱擁』

—— ベトナム戦争後の日野啓三 ——

安藤 優一

島田雅彦『彼岸先生』再考

—— 「漱石」を語るという権威 ——

山崎 和

司会 塚本 飛鳥・吉田 和佳子

一四時五〇分より

## 【第二部】特集 〈山〉の想像力 —— 近代日本のアルピニズムと文学 ——

山岳紀行の停滞／山岳小説の発生

—— 一九三〇年代の山岳文学 ——

中村 誠

保田與重郎における風景観とアルピニズム批判

—— 歌枕としての山と伝統 ——

河田 和子

〈遭難〉というトリック

—— 高度経済成長期の山岳ミステリー ——

尹 芷汐

閉会の辞

代表幹事 一柳 廣孝

司会 渋谷 百合絵・矢口 貢大

※終了後、6号館地下階フードコートにて、懇親会を予定しております。

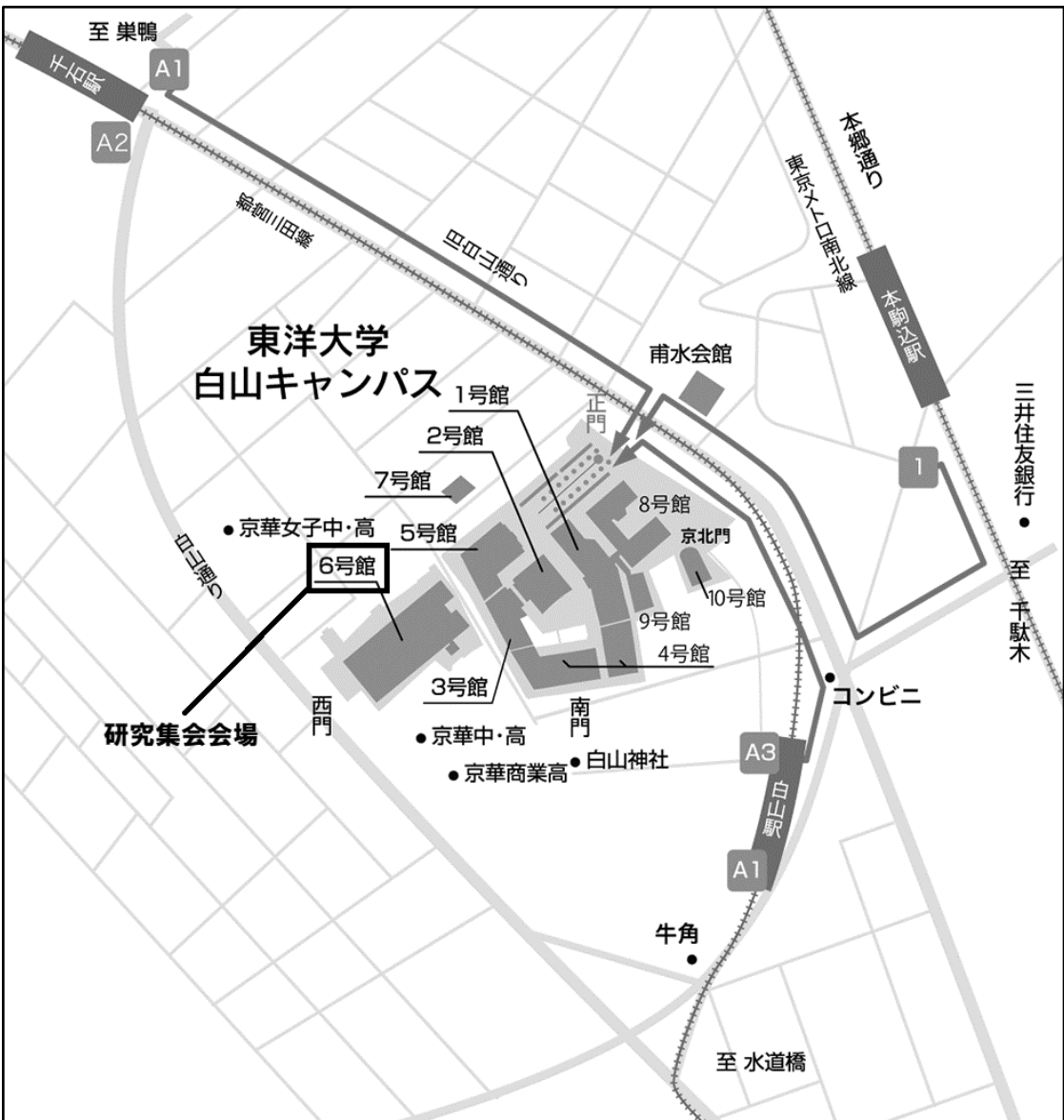
予約は不要、当日受付にてお申し込み下さい。

# 東洋大学 白山キャンパス アクセスマップ

- ・都営地下鉄三田線 白山駅 A3出口から徒歩5分
- ・都営地下鉄三田線 千石駅 A1出口から徒歩8分
- ・東京メトロ南北線 本駒込駅 1番出口から徒歩5分

※研究集会会場は6号館です。

大学周辺図



## 【第一部】 自由発表

### 《發表要旨》

転換点としての『抱擁』——ベトナム戦争後の日野啓三——

安藤 優一 (あんどう・ゆういち)

日野啓三『抱擁』(一九八二年)は、それまでの私小説的な作風から大きく変化した重要な一作に位置づけられている。日野は本作を、八〇年代半ばの『夢の島』(一九八五年)などの作品群への「転換点」に立つ作品と言及してきた。

本作は東京都心の洋館を舞台に、その内部へ足を踏み入れていく〈牧〉を語り手に進行する。そこで出会う少女〈霧子〉の父親は戦争下のベトナムで失踪したと説明される。

日野の小説家転向の契機は、ベトナム戦争特派員として現地を抱えた「この現実には小説でしか書けない」という問題意識にある。帰国後にはそうした意識を反映した実験的な作品群を発表した。『抱擁』はそれらとは異なる、一見、様式化された物語世界であるが、本作においても、かつてのベトナムの影が差している点は重要である。今回の発表では、「転換点」と位置づけられてきた本作の、その転換の内実を、日野のそれまでの文学的軌跡も踏まえつつ、捉え直してみたい。

(青山学院大学院)

島田雅彦『彼岸先生』再考——「漱石」を語るという権威——

山崎 和 (やまざき・なほみ)

島田雅彦『彼岸先生』(福武書店、1992・3)は、単行本の帯に「平成版『こころ』と付され、『こころ』との関連性を伴って刊行された。『彼岸先生』の評価としては、小森陽一による『こころ』という小説から、性的な色彩を脱色しようとしつづけた、国家的規模で形成されている第二次世界大戦後の日本の読者共同体に対する、悪意ある挑発」というものが一般的であろう。単なる『こころ』のパロディとして捉えるのであれば、これが妥当な評価だろう。しかし、『彼岸先生』刊行直後から『毎日新聞』で行っていた連載「週刊瞳目新聞」での対文壇。ハフォーマンズや『漱石を書く』(岩波書店、1993・12)、更にはそれ以後の漱石に関する言説、そしてその後の各文学賞での選考委員入りを併せて考えるのであれば、今までは異なる評価をすることが出来るのではないか。90年代初頭に於いて権威獲得のために語られた「漱石」と、そのために利用された『彼岸先生』として再考してみたい。

(千葉大学大学院)

## 【第二部】 特集 〈山〉の想像力——近代日本のアルピニズムと文学——

### 《企画趣旨》

二〇一四年より国民の祝日として、新たに「山の日」が制定された。近年の登山ブームのなかで、休日には多くの人々が登山に駆り立てられ、書店は〈山〉に関する雑誌や書籍で溢れている。国民的なレジャーとして制度化された登山は、始発期より、フィジカルな身体運動としての側面に留まらず、その行為を記録・出版するという言語的営為を必然的に抱え込むものでもあった。

日清戦争のさなかに刊行された『日本風景論』(一八九四)において、志賀重昂は「登山の気風を興作すべし」として、日本における登山文化の形成を図った。その呼びかけに応じたかたちで日本山岳会が結成され、近代登山が幕を開ける。近代登山は西洋のアルピニズムを範とし、日本の山岳地帯をアルプス山脈になぞらえ「創造的な登山」を掲げて成立したために、それまでの山岳信仰や山地の生活文化との差異において自己を規定していく必要があった。またそこには〈山〉の美や高さに「崇高さ」を見出し、都市で疲弊した近代人の治癒と自己省察の場とするロマン主義的な志向性が結びついていたために、〈山〉について語り、記録することが不可欠のものとして求められたと考えられる。

このとき日本山岳会に島崎藤村、田山花袋、小山内薫ら多くの文学者が参集していたことは興味深い。「紀行文家」と称される多くの作家たちが〈山〉に登りその体験を言語化する一方で、小島烏水ら登山家たちもまた山岳紀行文の主要な書き手であった。また作家の登山体験は小説作品にも形象化され、夏目漱石『二百十日』の阿蘇山、芥川龍之介『河童』における穂高岳や、志賀直哉『暗夜行路』における大山のなどの山岳描写を生み出していくこととなる。

このように近代登山が書く行為を含みこむ形で成立したことで、山岳文学の書き手は文学者か／登山家かという根源的な問いを生むこととなった。一九三〇年代になると同時代のリアリズムをめぐる議論と歩調を合わせる形で、勝本清一郎や桑原武夫らによって「山岳文学論争」が展開され、情緒的紀行文としての色彩が強かった山岳文学からの離脱と、〈山〉を語る

新たな文体獲得が模索された。また戦時下においては保田與重郎が、「日本アルプス」など西欧の地名を日本の風景に移し替えていく想像力の機制を「植民地風景」として批判している。ここでは西欧的アルピニズムから〈山〉を奪還し、従来の歌枕的美観を復興することが求められたのである。

一九五〇年代には串田孫一を中心に山岳文芸誌『アルプ』が創刊され「山岳文壇」とも称すべき特異な領域が形成されるところにも、現実の遭難事件を題材とする井上靖『氷壁』、松本清張『遭難』が発表され、新田次郎の山岳小説があらわれるなど、山岳文学は新たな展開を見せていく。六〇年代には深田久弥『日本百名山』が刊行されるが、〈山〉を序列化し「名山」として権威付けるまなざしは、消費社会におけるツーリズムへの欲望と接合しながら大衆的な登山ブームを生み出すこととなった。そして『日本百名山』に即した登山の枠組みは、九〇年代以降もNHKのテレビ番組などのメディアを通して、繰り返し反復・再生産され、今日もなお大衆的な登山行為を深く規定しつづけている。

本企画では、上記の問題意識から〈山〉という空間を再考し、近代日本の〈山〉をめぐる想像力の功罪をクリティカルに検討する。

## 《発表要旨》

山岳紀行の停滞／山岳小説の発生——一九三〇年代の山岳文学——

中村 誠(なかむら・まこと)

一九〇六(明治三九)年、山岳会(後の日本山岳会)の機関誌である「山岳」が創刊される。「山岳」に関する考察紀事、一切を網羅し、山岳趣味と知識の啓発に任せん」と標榜し、多様な内容を誇ったこの雑誌は、山岳紀行発表の場としての役割も担いその発展に寄与した。しかし、登山界の状況の変化と大衆化の中で、一九三〇年代には山岳紀行の質的低下が問題とされるようになる。一方、山岳紀行の行き詰まりの中で山岳小説の発生という現象も起こってくる。あるいはスポーツ小説の一環として、あるいはヨーロッパの山岳小説を倣うものとして、それは始まっている。

従来、山岳小説は戦後の井上靖・新田次郎あたりから考えられがちで、そこに至る前史についてはほとんど検討されて来なかった。本発表では、山岳紀行が変遷していく有様を近代登山史を踏まえて振り返るとともに、山岳小説が発生する経緯について検討してみたい。

(中部大学非常勤講師)

保田與重郎における風景観とアルピニズム批判——歌枕としての山と伝統——

河田 和子(かわだ・かずこ)

戦時下の昭和一〇年代後半にかけて、登山ブームが到来する中、保田與重郎はその流行を批判する形で『風景と歴史』(昭和一七年九月)など一連の日本の風景、美観に関わる評論を発表しており、その中でアルピニズム批判を行っている。保田が当時の登山ブームを難じたのは、西洋由来の地理学的、科学的概念によって日本の風景を捉えることで日本の伝統的な風景観として歌枕的美観が失われていくことを憂え、その伝統的美観の復興(古典復興)を考えていたからである。

保田のアルピニズム批判は文明開化批判Ⅱ(近代の終焉)の思想と繋がっているが、伝統的な風景観として希求された歌枕的美観とはどのようなものだったのか。彼の評論に出てくる山について、二上山など具体的にいくつか取り上げて考証したいが、そこに芸術は神に通じるものという(神詠思想)も見られる。本発表では、保田のアルピニズム批判と歌枕的美観の内実を考察するにあたり、その自然観と芸術意識の関わりについて検討したい。

(九州大学大学院比較社会文化研究院特別研究者)

《遭難》というトリック——高度経済成長期の山岳ミステリー——

尹 芷汐(いん・しせき)

一九五〇年代後半、中間小説を多く掲載した文芸誌と週刊誌を中心に山岳ミステリーが登場した。「犯罪事件」あるいは「事件性」をほらんだ「登山」と「遭難」の物語を多く生み出したこのジャンルは、都市／山、世間／自然の二項対立を攪乱し、かつて崇高なるものとされてきた〈山〉を、都市のエリート層である男の様々な欲望を映し出す空間として再イメージ化したといえる。また、男の登山を見守る／男に征服されるものとして設定されたヒロインの存在も無視できない。こうした物語のパターンは、高度経済成長期の生活、メディア、ジェンダーなど外的諸条件によって規定されるものだが、安易に反映論的に捉えるのではなく、書き手と読み手のどのような欲望によって、そして政治性を帯びた眼差し、言葉、イメージがどのように干渉し、表象を形成しているのかを考えるべきである。本発表は松本清張『遭難』と「文字のない初登攀」、新田次郎『消えたシニプール』、森村誠一『密閉山脈』という四作品を取り上げて以上の問題を考察する。

(名古屋大学非常勤講師)